



今年も加藤文俊研究室が三宅島にやつてきた。本研究室が三宅島を初めて訪れてから今年で三年目に突入し、今回は一七名という大所帯で滞在している。三宅島大学本校舎(御藏島会館)を活動の拠点とし、家事を分担して大家族のように生活している。

おかげさまで、三年目。



三宅島の滞在は二泊三日が基本である。そこで活動の拠点とし、家事を分担して大家族のように生活している。

今年も加藤文俊研究室が三宅島にやつてきた。本研究室が三宅島を初めて訪れてから今年で三年目に突入し、今日は一七名という大所帯で滞在している。三宅島大学本校舎(御藏島会館)を活動の拠点とし、家事を分担して大家族のように生活している。

今年も加藤文俊研究室が三宅島にやつてきた。本研究室が三宅島を初めて訪れてから今年で三年目に突入し、今日は一七名という大所帯で滞在している。三宅島大学本校舎(御藏島会館)を活動の拠点とし、家事を分担して大家族のように生活している。

り、その中で取材、「あしらばん」発行など、さまざまな活動を行なう。金曜日、本研究室が三宅島に到着してまずやることは、仮眠をとることである。都会の生活に馴染み、船に揺られることに慣れていないわたしたちが、船で熟睡することは不可能に近い。五時間の睡眠を船で取れたとしても、島に上陸すれば疲労を感じるものである。そのため、三宅島大学本校舎に到着したらまず二時間程度の仮眠を取る。ここで睡眠が、今後の活動に大きく影響するのである。

仮眠が終わり次第全員集合し、その日ににおける動きの打ち合わせに入る。

壁一面の黒板を使用し、タイムスケジュールを書き込んでいく。しかし、必ずしもスケジュール通りに進行する

ことは限らない。天候による船の就航状況など、さまざまな条件によって流動的に動くことを余儀なくされる。どん

なことがあっても、柔軟に対応することが求められるのである。

打ち合せ後は、それぞれの活動を

2013年
(平成25年)
6月22日
土曜日

あしらばん編集部
発行所: 加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第三十六号

時間はゆっくりと。

つくば荘の筑波昭一さんのご好意で、ところてん作りを手伝わせて頂いた。ところてんと言えば、ちゅるちゅるとしていて夏にぴったり。さっぱりとしたあだだ。天草から作られていることは知っていたが、実際に作られて見ると、そこそこ見たことはなく、完成してパッケージされたものしか私は知らないなかつた。初めての経験に胸をおどらせ、つくば荘に向かつた。

着いてすぐ、筑波さんのいる作業場へ伺つた。そこはじりじりとした熱さがあり、時々心地よい風が通つていた。

その熱さのもとは七輪。筑波さんの前には七輪の中で真っ赤に染まつた炭、

その上では鍋がぐつぐつと煮立てられていた。「鍋のふたをあけてご覧ん」。

中をのぞいてみると、天草が冷湯の中

で揺らいでいた。「天草って肌色に近

い茶色なんですね。私の想像とは違

っていて、どこか優しい色をしたそれに思わず見入つてしまつた。

「もう鍋から移していくよ」。気付く

と吹き零れそうになつて、鍋を外へ

持つて行き、持参したタッパーに移す

作業に入つた。天草が一緒に流れ出な

いよう、ゆっくり、慎重に流し入れる。

鍋いっぱいにあつたと思われた煮出し汁は、あつけなく一つの小さなタッ

パーにおさまつた。光沢のあるきつね

色で満たされる。ところとおとしたそ

れは、食べ物とは似つかない美しさを

もつて動いている。

(田中優里)



(青山大毅)

はなるべく使わない」「夕飯の買い出しあは早めに」。前述した通り、本研究室が三宅島を訪れて三年目になる。これまでの経験が蓄積されることにより、毎回の滞在が洗練されていくようである。この活動の集大成が、ポスターや『あしらばん』というかたちで出力されている。是非、今後も『あしらばん』を取り、わたしたちの活動を知つてほしい。

（青山大毅）

ふたを半分ほど開け、煮出し汁が冷めるのを待つた。数十分待つても、熱をもつたそれはなかなか固まってくれない。私はまだかまだかといまも待つていて。待つた分だけ、美味しさは増していく。それを楽しみに、私は夕食作りに取り掛かろうと思う。

煮立つのを待つ間、筑波さんは持っている本やアルバムを見せてくれた。たくさんある本の中でも興味を持ったのは「三宅島史」。これには三宅島の歴史がすべて載っている。私は本を眺める。糸がほつれた本のカバー、手垢の付いた紙、めくる度に少し舞うホコリ。じかんが経つのは早くて、あつけなくて、一秒一秒に目を向かれなくて。でもあとから見れば、じかんはゆっくりと、あたたかみをもつて動いている。

• • 三宅島に住むとは？ • •

「葛藤と戦い」。それは、誰もが帰属する社会で何らかの対象物に対しても直面することだ。私が今回取材した食事処「花鳥羽」の花田さんは、葛藤と戦いという現実問題に対し、離島とうる素朴感、無垢感の中へ移り変わる時代とともにそれを感じていた。

花田さんは現在六八歳であり、青森県出身である。これまで三宅島以外にも船橋、川口、赤羽、東京芸術大学の学食などさまざまな環境で経験を積んだ。また国内という垣根を超えて、フランス、ドイツなどでも料理研修を行い活動の場は多岐に渡るが、その中でも生活する環境として、または商売を営む場として何度も選択する場が三宅島。二度の噴火に苛まれ、やむを得ず島を後にして、また三宅島に戻つてく。その理由は花田さんが頑固であるという性格以上のもの。親方に憧れ、島まで追い求めて来てからこれまでたくさんの島民と接し触れ合う中で生まれた「島を愛する」気持ち。旅人となり事になる三宅島の情景は、花田さんの心に色濃く残っている。それは彼自身の支えであり、生きることである。花田さんはこうおっしゃった。「東京芸術大学で食べた、豆腐ともやしとバターの和え物の味が忘れられない。今度学生じゃないけど入つてみようか

な。あれは俺が三宅島に行くことになった原点だから」。冗談まじりでとてもさくなか。その中にも忘れる事のない故郷への哀愁と変わりはない三宅島への情景がこれから彼を駆り立てるよう思えた。

「噴火が終わって帰ってきたけど、三宅島の人々は良い意味でも悪い意味でも都会の影響を色濃く受けた帰つて来た。でもそれってたまたもんじゃねえな！」あ、もちろん島は大好きなんだよ」

(小川健太)

~~~~~  
島の情  
~~~~~

三宅島の表

三宅島さんぽ。探險気分で島を歩いてみて、私はその穏やかさに驚いた。青い海を見ながら、その海から吹く爽やかな風にあたるだけで時の流れを感じた。それができる。数日前までビルに囲まれながらせかせかとした生活を送っていたことが信じられない。

三宅島大学を出て三宅島一周道路を歩いていると、波の音だけでなく、ふとウグイスの鳴き声が聞こえてきた。鳥のさえずりを耳にするなんていつぶりだろう。東京は人工的な音で溢れかえっていて、風の音や鳥の鳴き声などが知らず知らずの内に埋もれてしまふ。こんなにも鮮明に自然の音が聞こえてくるのもこの島の、のどかさ故である。

そのまましばらく歩くとメガネ岩に



(耕野友香)

有名のこと。澄んだ水と入り組んだ海底、そこに住む多種多様な生物の姿を想像しただけでワクワクした気分になる。崖の上から覗く海の姿も美しい。かつたが、水中からの見渡す景色はまた格別なのだろう。穏やかさにある力強さや自然の摂理、三宅島にはまだまだ魅力が潜む予感がする。

(耕野友香)

ポスター展

慶應義塾大学 加藤文俊研究室による
ポスター展を開催致します。

6月23日(日)午前10時～
三宅島大学本校舎(御藏会館)

また訪れる日までの
お約束

お約束

辿り着いた。景色が一気に開けた途端私の目に飛び込んできたのは、想像をはるかに超えた光景であった。壮大な海と黒い岸壁に打ち付けられる白い波、その波が押し寄せるたびに響く大きな音と振動と波しうき…その姿はまさに圧巻で、私は思わず息をのんだ。噴火によって出来たメガネ岩が、噴火によって姿を変える。それまでの穏やかな島の印象から一変、自然の威力を感じた瞬間だった。調べてみると、メガネ岩はダイビングスポットとしても有名のこと。澄んだ水と入り組んだ海底、そこに住む多種多様な生物の姿を想像しただけでワクワクした気分になる。崖の上から覗く海の姿も美しい。かつたが、水中からの見渡す景色はまた格別なのだろう。穏やかさにある力強さや自然の摂理、三宅島にはまだまだ魅力が潜む予感がする。

最初に訪れたのは、二〇一二年の六月。鮮明に覚えているのは、緑の森の中から、黒い木々が手を伸ばしている。この三日間の滞在が、私にとって学生生活最後の三宅島への旅となつた。

向こうの存在だった私にとって、ここまで自然の力を肌で感じたことはなかったと聞いたこと。メガネ岩から見る夕日や溶岩でできた浜。火山はテレビのように点在していること。火山の煙にようしてところどころ葉が生えなくなつたと聞いたこと。メガネ岩から見る夕日や溶岩でできた浜。火山はテレビの力でしか見ることが出来ない景色。その場でしか見ることが出来ない景色。その場でしか味わえないもの。ひとつひとつのこと記憶に留めておきたい。この島の人のように、私も誰かを料理で笑顔に出来るような人になつて、また訪れた。

(蓬生まり)